

はじめに

熊本県文化企画課松橋収蔵庫では、平成二十二年三月に施設の一部リニューアルを行い、展示スペース拡張のほか、展示器具追加などにより充実した展示活動を行うことができるようになりました。リニューアル後初となった平成二十二年度第一回目の企画展示は、近代日本最大にして最後の国内戦争となった西南戦争に注目しました。

西郷隆盛率いる薩軍と、谷干城ら熊本鎮台との衝突から開戦となった西南戦争は、熊本県内を主要な戦場として展開し、この間、県下各地では多くの人がさまざまな形で戦争に巻き込まれたものと推測されます。しかし、これらに関する研究は少なく、民衆がどのように西南戦争と向き合ったのかについては明らかにされていません。本展示では、当収蔵庫所蔵の阿蘇郡高森町出身の神官・安藤経俊、石工・甲斐有雄が記したふたつの明治十年日記を手掛かりとして、この新たな側面に迫りました。

本展示は平成二十二年五月十二日（水）～六月十八日（金）にかけて当収蔵庫展示室にて開催し、その後、その一部を熊本県立図書館において松橋収蔵庫移動展示として実施しました。お陰様で多くの来館者の皆様に展示をご覧いただくことができました。

今回この展示成果と合わせて、未発表であった甲斐有雄明治十年日記の資料写真とともに展示資料集として「ふたつの明治十年日記」を発刊することといたしました。

最後になりましたが、本展示のために貴重な資料の出品や、写真の提供などにご協力いただきました関係各位に、厚く御礼申し上げます。

平成二十三年三月

熊本県企画振興部文化企画課長

目次

はじめに・・・・・・・・・・	3
目次・・・・・・・・・・	5
凡例・・・・・・・・・・	6
展示資料解説	
安藤経俊・甲斐有雄と西南戦争・・	7
熊本城炎上と御船の戦い・・	15
西南戦争関連資料・・	21
経俊の尾崎潜伏と軍夫有雄・・	35
ふたつの日記こぼれ話・・	45
錦絵に見る西南戦争・・	51
資料紹介 甲斐有雄の明治十年日記について・・	57
甲斐有雄明治十年日記資料写真・翻刻	
瀬井家資料「明治十年日記」写真・・	79
瀬井家資料「明治十年日記」翻刻・・	154
安藤経俊・甲斐有雄略歴・・	197
展示資料一覧・・	198
展示協力者一覧・・	200

凡 例

一、本書は、平成二十二年五月十二日（水）から六月十八日（金）まで開催した、熊本県文化企画課松橋収蔵庫企画展示「ふたつの明治十年日記 神官・石工が記した西南戦争」の展示記録、及び当収蔵庫所蔵瀬井家資料「明治十年日記」の資料集として作成した。

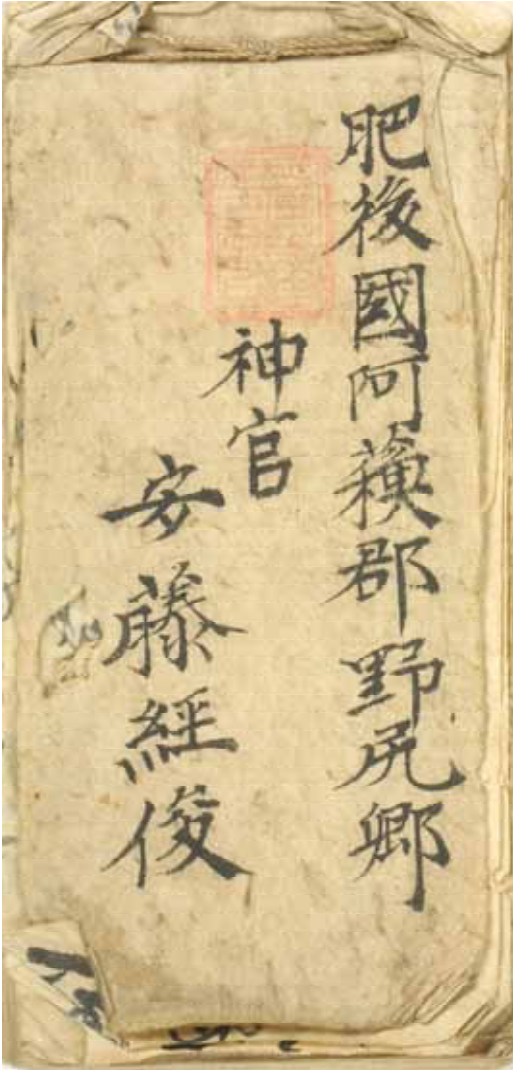
一、展示記録は展示構成の順序と一致し、各資料番号は展示番号と一致する。

一、資料解説は、番号、名称、員数、法量（縦×横、単位cm）、所蔵、解説の順で示した。

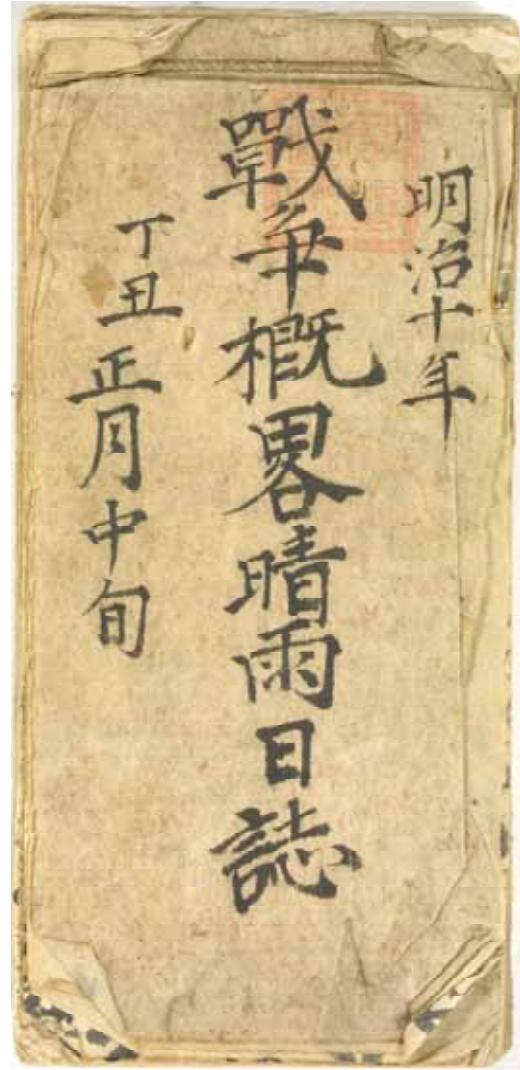
一、瀬井家資料「明治十年日記」写真及び翻刻については凡例を別記した。

一、本書の執筆・編集は木山貴満（熊本県文化企画課嘱託）が担当し、田中孝行（同課主任主事）が編集補助として協力した。

一 明治十年戦争概略晴雨日誌



裏表紙



表紙



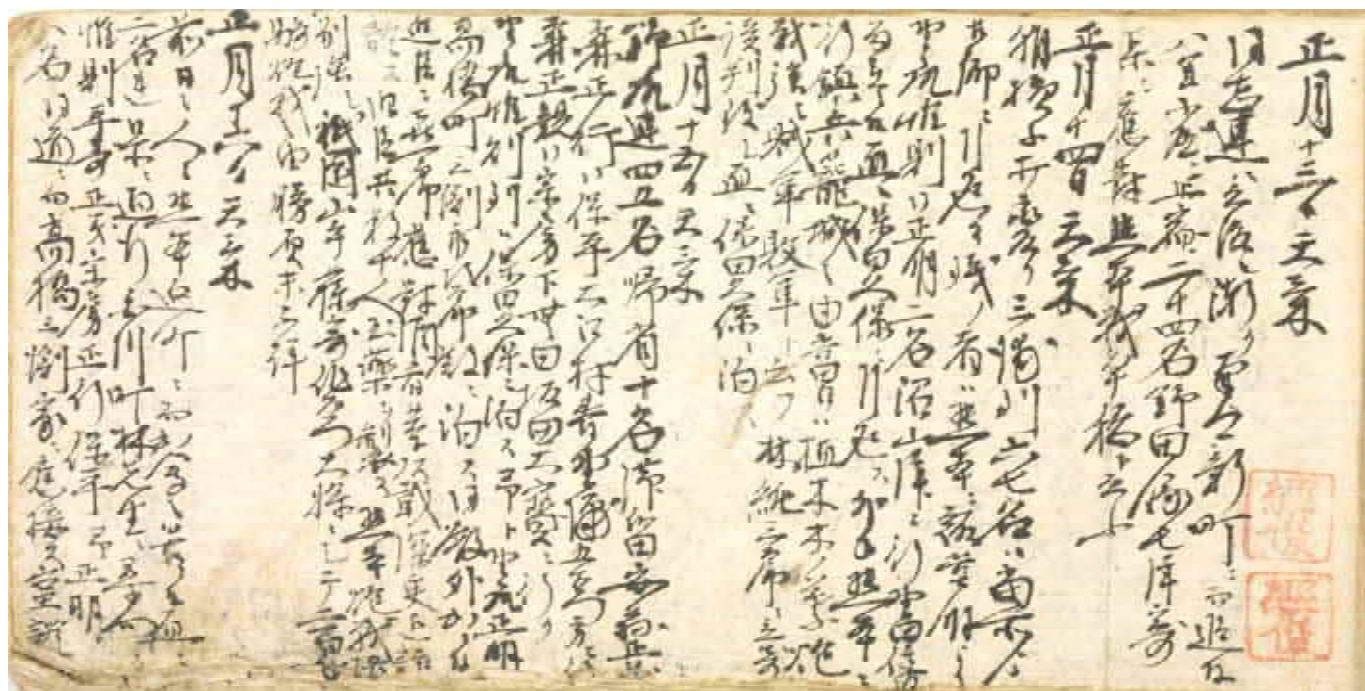
鹿兒島城下のスケッチ

横長帳

縦九・〇 横一八・五

高森町安藤家資料

一冊



日記（部分）

阿蘇郡野尻村・川上神社神官の安藤経俊は西南戦争へと参加するため、仲間たちとともに郷里を出発した正月一三日（新暦では二月二五日）より当該日記をつけ始めている。本資料は西南戦争の日々にあつて経俊が常に携帯し、その日の出来事や戦争の推移、戦場における経俊の心情などを詳細に記録したものである。

経俊は同戦争において薩軍側の熊本隊（隊長・池辺吉十郎）に参加し、政府軍を常に「賊軍」・「賊兵」と呼んでいる。御船の戦いは激戦のなか、同郷の森正親が戦死している。この後、経俊は一旦戦闘の前線から退いているが、鹿児島城山まで赴き、西郷隆盛以下薩軍の最期を見届けている。

日記内容の詳細については甲斐利雄編『一神官の西南戦争従軍記』（熊本出版文化会館）を参照いただきたい。

本資料は熊本における薩軍参加者の戦争参加の様子、日々の思考・動向を知るうえでも貴重な資料である。

二 明治十年日記



表紙



(2月21日条) 熊本城下のスケッチ



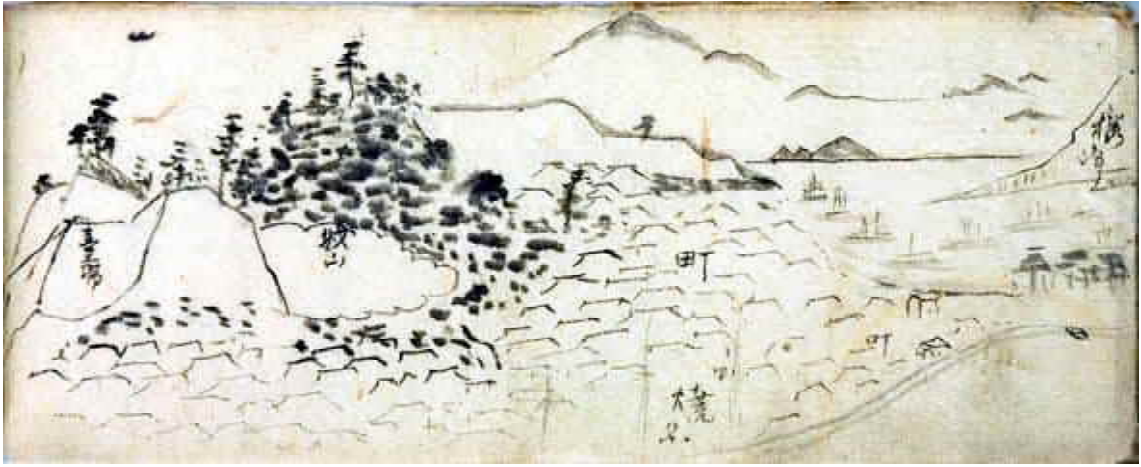
(4月8日条) 熊本城下のスケッチ

横長帳

縦六・三 横一七・〇

高森町瀬井家資料

一冊



(9月11日条) 鹿児島城下のスケッチ

阿蘇郡野尻村と隣接する尾下村に居住していた石工・甲斐有雄は、阿蘇原野における多数の道標設置によって知られる人物である。有雄が毎年記していた日記のなかに、西南戦争が勃発した明治一〇年（一八七七）の日記が含まれている。

有雄は石工仕事と道標建立を行う日々のなかで、村人などから戦争についての情報を入手し、記録している。日記の記録には有雄が実際に見たものや、耳にした銃声などもある。また、有雄は狂歌や絵などを嗜む風流人であり、日記には目にした風景のスケッチや、戦争に対しての心情を詠んだ狂歌なども書き付けられている。

七月からは政府軍軍夫として従軍し、豊後方面での補給などを行い、その後は鹿児島城山まで従軍している。西南戦争における軍夫従軍者の日記はほぼ例がなく、貴重である。安藤経俊日記と併せて、熊本県下の民衆が同戦争といかに向き合っていたかを知るうえで重要な手掛かりだといえるだろう。

本資料の詳細は資料紹介及び写真・翻刻を参照いただきたい。

三 安藤経俊一代ノ履歴 草稿



縦帳・綴 縦二四・四 横一六・四 一冊

高森町安藤家資料

大正七年（一九一八）、経俊が七七歳（喜寿）に際して記した自身の履歴草稿である。天保一三年（一八四二）の誕生（幼名・志津馬）から、大正六年（一九一七）の神官辞職までをまとめている。罫紙に墨筆されたもので、表紙・裏表紙見返しなど所々に朱筆で和歌も書き込まれている。

明治一〇年（一八七七）の西南戦争参加に関しては、二つの項目にまとめている。経俊は同年二月より九月まで池辺吉十郎率いる熊本隊に参加したが、「天佑神助」のおかげで無事に帰ることができたこと、ほぼ一年に及ぶ苦戦の結果、一八日間拘留されたものの、情状酌量のために無罪放免となったことについてである。

経俊は西南戦争以後、郷里において神職に励んでいる。明治四四年（一九一一）に福岡で社職大会が開催された際には老齢の身ながらこれに参加している。

四 褒賞状（石塔建立）

切継紙・卷子装

縦三・九

横三〇・八

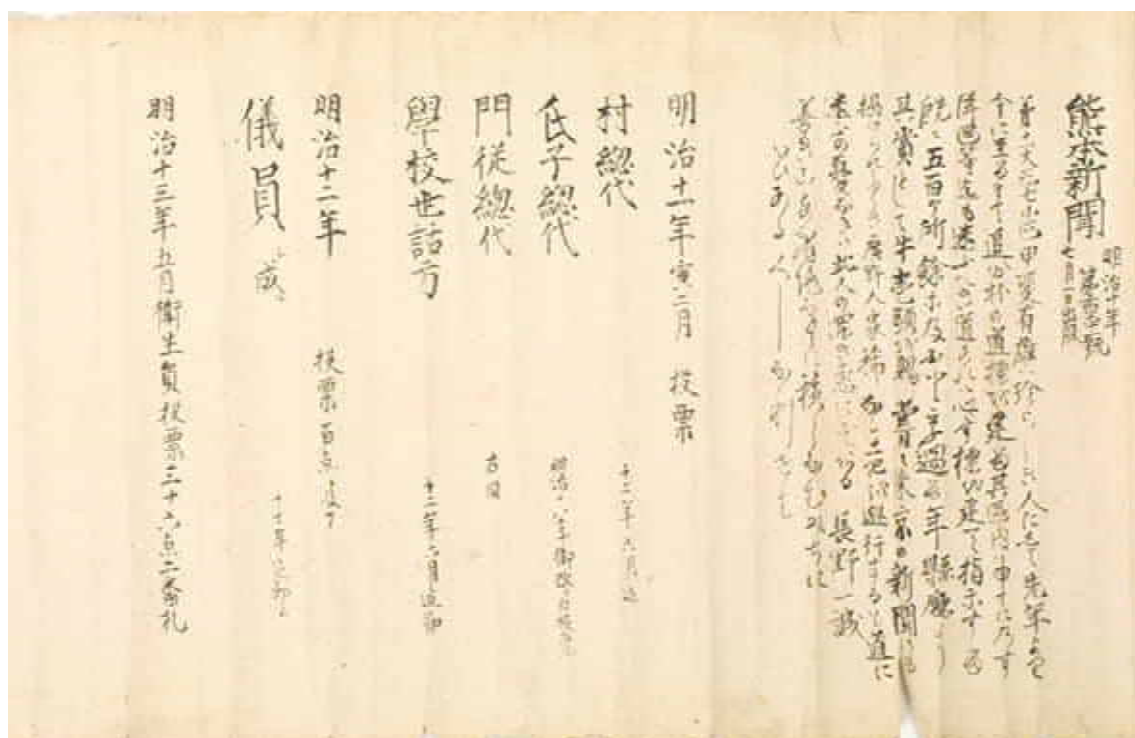
一巻

高森町瀬井家資料

甲斐有雄
阿蘇郡野尻郡ノ
儀ハ廣漠ノ原野
ニテ教條之道筋
行人之迷惑ヲ察シ
先年來自力ヲ以
テ石標ヲ設置
イタシ候ニ付テハ於

石標ヲ設置
イタシ候ニ付テハ於
舊藩賞美中付
置テ其後不
替主ニ成テ其力
終ニ三百有餘ノ
功業ヲ顕ニ其柄迄
廉ニ其心ニ其成
奇特ノ至ニ付其賞

功業ヲ顕ニ其柄迄
廉ニ其心ニ其成
奇特ノ至ニ付其賞
トシテ牛一匹差遣
候事
明治六年二月
白川縣
縣



明治六年（一八七三）二月に白川県から甲斐有雄に授与された、石塔（道標）建立に対する褒賞状である。有雄の道標建立は「奇特ノ至」であるとして、このとき牛一頭が贈られている。有雄に対しては旧熊本藩からも褒賞が行われたが、その後も有雄が継続して建立に取り組んだことがここで賞されている。卷子装となっているが、所々で紙の継ぎ目が外れており、軸木も外れている。

この褒賞状に続いて有雄の道標建立事業を報じた、熊本新聞の記事（明治一〇年第一六一号、七月一日発行）も写されている。この写しは有雄自身によって為されたものと考えられるが、新聞での報道は有雄にとっても喜ばしいことだったのだろう。

七 御船附近戦闘要図

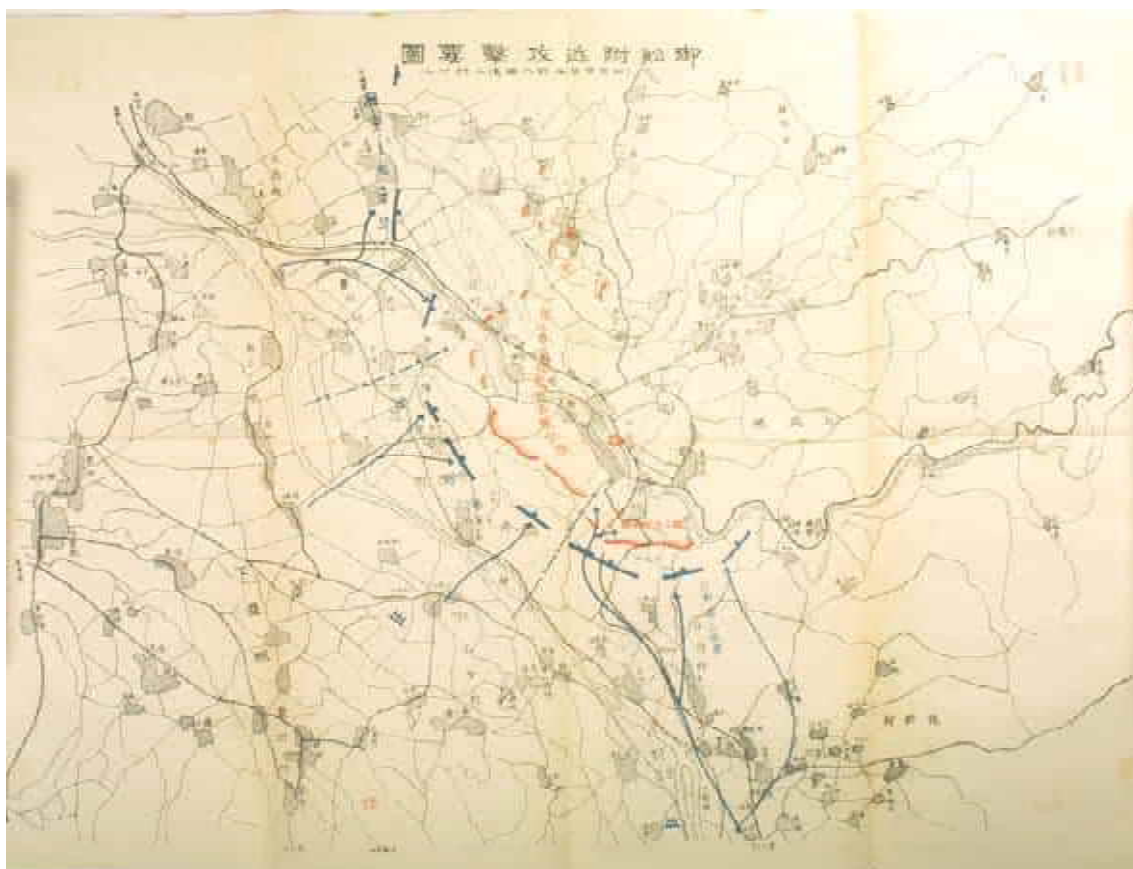
紙本著色

縦三九・七

横五四・一

熊本市辛島家資料

一枚



森正親が戦死した、高野村（高木村の一部）付近に見える薩軍守備線

昭和十三年（一九三八）に出版された、『明治十年西南戦史』には全二枚の地図が附録されている。これはそのうちの一枚で、御船の戦いにおける戦闘状況を図示したものである。熊本隊をはじめとした薩軍側の守備線を朱色で表し、政府軍側を青色で表している。

安藤経俊の仲間として、ともに戦ってきた森正親がこの戦いで命を落としている。御船戦の後、経俊たちは正親の遺体を守りながら矢部方面へと退くことになった。

一〇一二 四斤砲弾



鉄製（部分・亜鉛） 口径八・六
一点
松本達也氏寄贈資料

四斤砲（仏式四斤山砲）は幕末期に日本へ輸入された火砲で、幕府ほか各藩で採用されたものである。砲弾の側面には一二ヶ所亜鉛のスタッド（筈翼）が付けられており、これが大砲内に刻まれた溝（ライフリング）に嵌って、発射の際、砲弾に回転を与える。

四斤砲は幕末・明治初期における野戦砲の代表格と呼べるものだが、明治一〇年の西南戦争でも両軍がこの四斤砲を撃ち合った。安藤・甲斐もそれぞれの日記のなかで、この砲弾の威力について書き留めている。甲斐有雄は三月二八日の日記で、大砲が当たった木が激しく打ち折れていたこと、ぬかるんだ田に砲弾が落ちていたことを記録している。

西南戦争では四斤砲をはじめとしたさまざまな武器・兵器が使用され、さながら兵器試験場のようなであったともいわれている。

一五 ヤタガン形銃剣



鉄製・革製（鞘）

一振

全長約一五〇・〇

松本達也氏寄贈資料

前装外火式の短小銃に使われたサーベル形銃剣で、歩兵の補助武器としても用いられた。銃口部の右横に密着させるように取り付けられ、弾込めの妨げとならないように剣は湾曲している。

ちなみに、ゲベル銃やミニエー銃で用いられたソケット式のスパイクは、その形状から銃鎗と呼称される。剣身は三角錐となっており、やはり弾込めの邪魔とならないように銃口の右横に取り付けられた。

本資料は英国短エンフィールド銃に使用されたもので、銃が後装式となった後もしくはこのヤタガン形銃剣が用いられた。

ただし、西南戦争時にいたるまで日本において最重要視されたのは日本刀であり、装備から外されることもあった。

一八 火薬入れ（伝薩軍使用） 一点

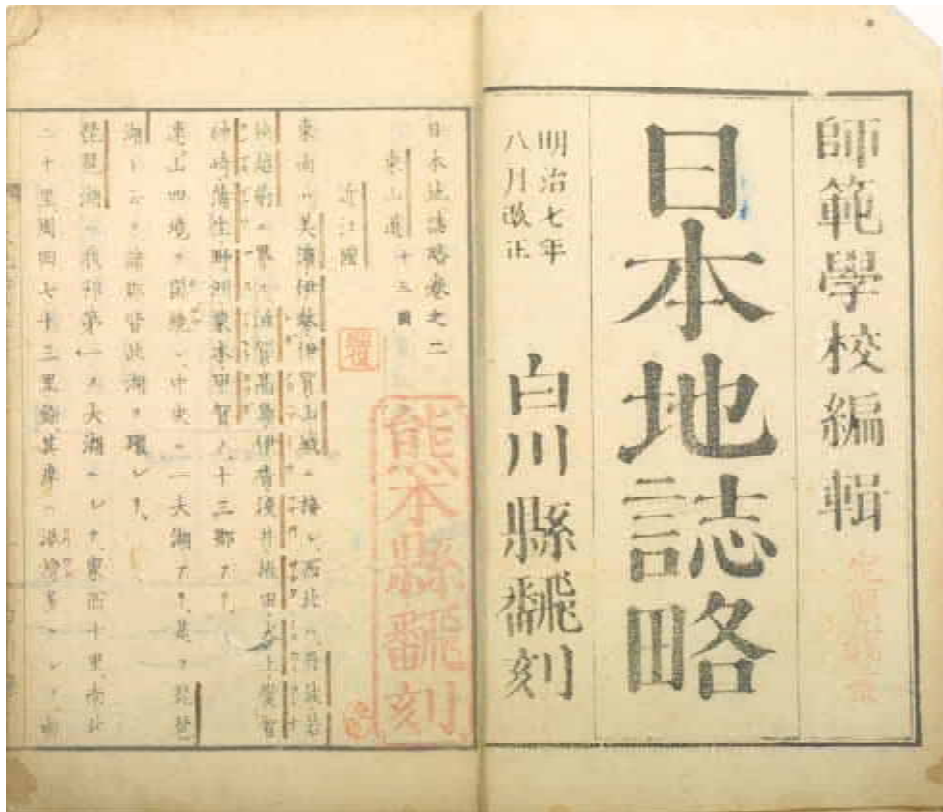
錫製 縦二五・四 横一八・〇

松本達也氏寄贈資料



本資料は熊本市新町の旧家に伝来した、薩軍使用の火薬入れといわれるものである。表面・取手など全体的に青錆が付着しているが、注口部分にはわずかに線刻のあとが見られる。

二月から三月にかけて薩軍は熊本城を包囲し、籠城する政府軍との間で激しい戦闘を行った。この戦闘により、熊本の城下町も大部分が焼失してしまった。



「日本地誌略」



「小学読本」

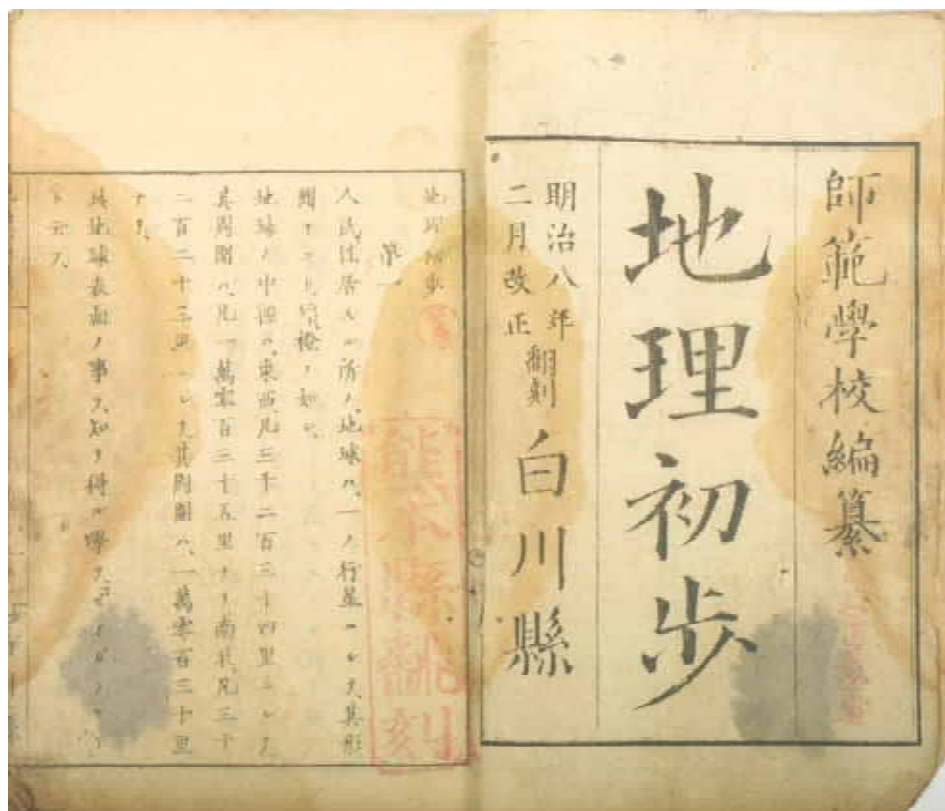
印刷・刊本

縦三・〇

横一五・〇

三冊

高森町安藤家資料



「地理初步」

安藤経俊は神官を務める傍ら、明治七年（一八七四）には教師の免許も取得している。本資料は経俊が教鞭をとる際に使用したと考えられる教科書である。両資料とも明治七年八月改正の教科書だが、「日本地誌略」・「地理初歩」は白川県による翻刻、「小学読本」は熊本県による翻刻となっている。それぞれ巻頭・巻末には、「安藤」の丸印や「経俊」の朱角印が押されているが、おそらく教師免許取得の前後に経俊がまとめて購入したものである。

経俊は五月五日に尾崎村（現・宮崎県椎葉村）へ入ると、天候などの関係から滞在を余儀なくされた。以後、経俊は同村で政府軍の動向などを探索し、薩軍へと情報を提供するようになる。このとき経俊は尾崎村の黒木寿健からの依頼に応じ、同村学校の教師へと臨時的に就任することになった。

おそらく経俊は本資料を携帯しておらず、尾崎村における教師生活では使用しなかったと考えられる。しかし、同地で行った授業は、これら教科書内容に沿ったものであったと思われる。ちなみに、経俊長男・幸男なども教師免許を取得し、のちに学校教諭となっている。経俊以後、安藤家は神職とともに教師を務める家ともなっていた。

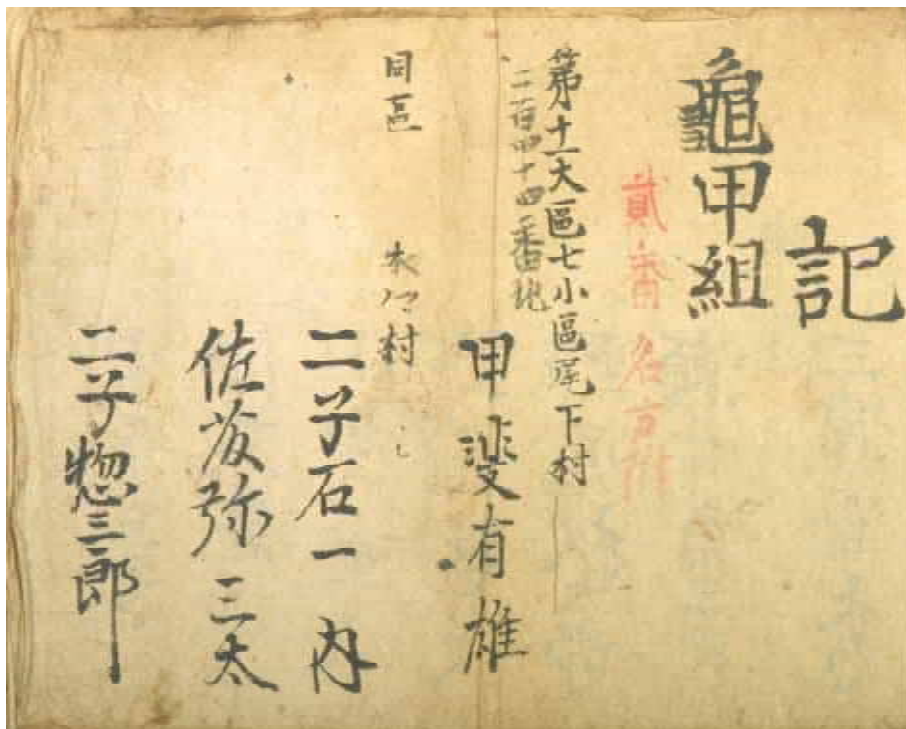
二四 軍夫受払帳



裏表紙



表紙



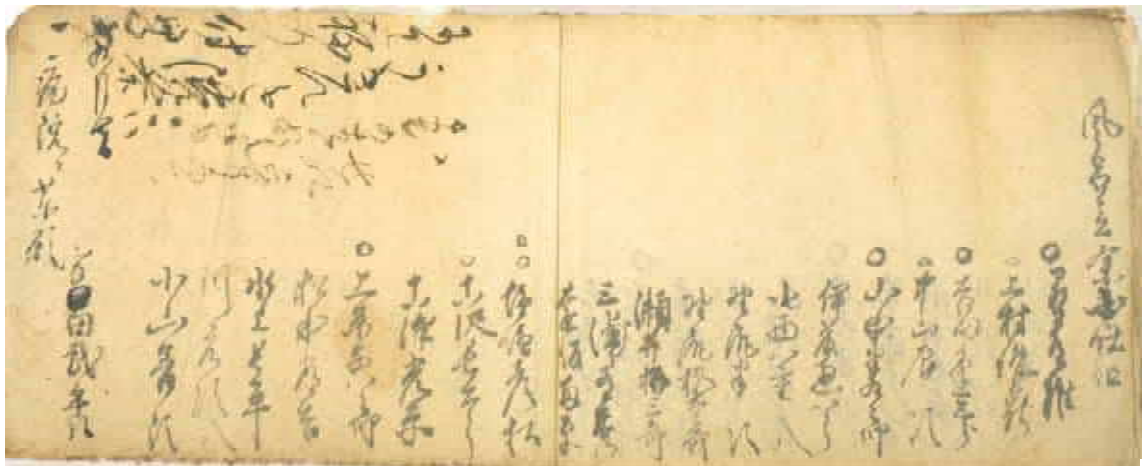
切紙・縦帳

縦二・二

横一五・六

高森町瀬井家資料

一冊

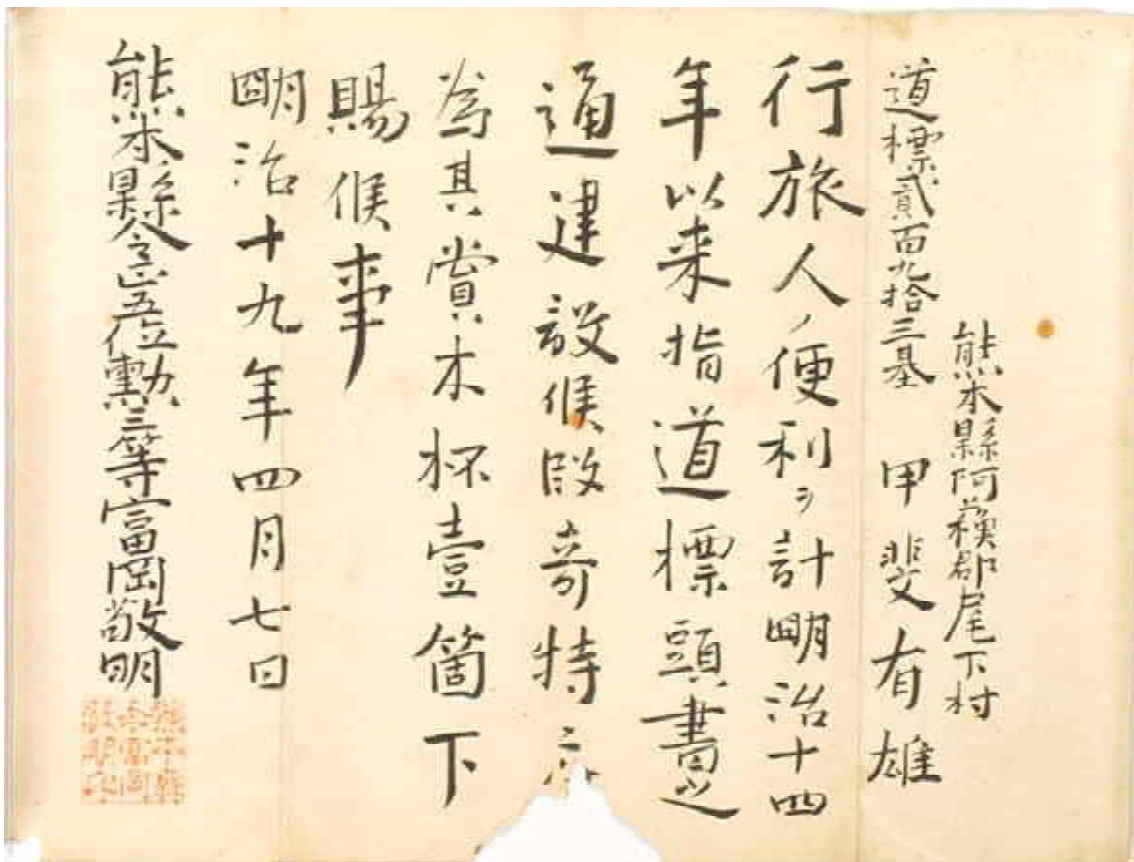


本資料は甲斐有雄が軍夫として所属した、二番「亀甲組」の軍夫受払帳である。軍夫はそれぞれ一〇〇人、五〇人、三〇人、二〇人、一〇人単位ごとに長（＝小頭）が置かれたが、二番亀甲組の二〇人長は中嶋藤太郎という人物が務めている（ただし、中嶋は林金蔵の代理）。この受払帳には組人数二〇名の氏名のほか、それぞれの軍夫役務内容、賃金支払いについて記録されている。資料中盤から記載されている賃金支払いの箇所では、冒頭の組員名と異なる名前が多く見られる。恐らく、中途での組人数交代が行われたものと思われる。

亀甲組は食料運搬、炊き出し、風呂焚きなどの雑務のほか、弾薬・荷物運搬などもこなしている。本資料は鎮台第一三連隊付きとして豊後地方へ従軍を開始した七月段階で作成されているが、有雄たちは九月の鹿児島城山落城まで軍夫役を務めている。

有雄は亀甲組のなかで巡番号一番となっている。有雄日記の記述からすると、二〇人長とは別に組人数の取りまとめ、賃金支払いの管理などを担当する立場にあったと考えられる。

二六 褒賞状



一枚
切紙 縦三・九 横三〇・八
高森町瀬井家資料

甲斐有雄は文久年間より道標石塔建立をはじめているが、これは西南戦争が起きた明治一〇年中も続けられている。軍夫として従軍した期間は除くものの、有雄はその後も継続して各地に道標を刻み続けた。

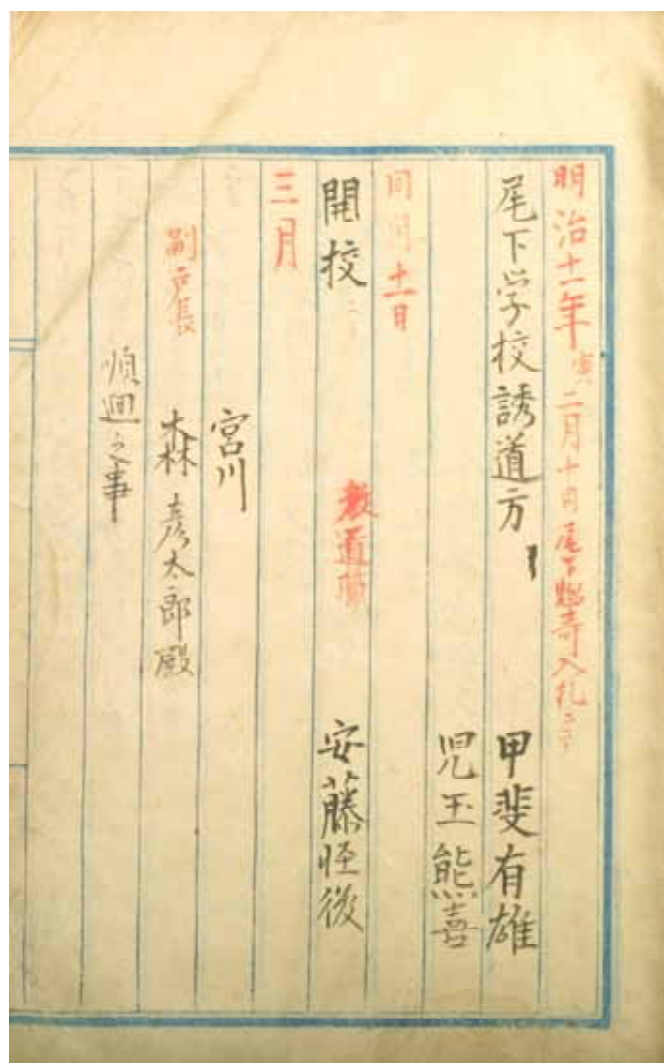
本資料は有雄の道標事業に対し、明治十九年（一八八六）、当時熊本県令であった富岡敬明の名で贈られた褒賞状である。

資料本文によると、明治一四年（一八八一）以来建立された道標二九三基に対する褒賞となっている。旅人の便利を思い、道標を建立したのは「奇特之至」である、として木杯一つが有雄に与えられた。

有雄の道標建立はたびたび熊本藩・熊本県から褒賞されており、このほかにも銀盃や牛一頭などがその都度与えられている。

また、有雄は明治初期において野尻郷河原組与長や尾下菅原神社の宮惣代、尾下小学校の世話人などの諸役に就いている。道標建立を行った、いわゆる「社会事業家」として、有雄は地域の人びとから信頼されていたのだろう。

二七 尾下小学校関係書類帳簿



罫紙・綴 縦二四・〇 横一六・五

高森町瀬井家資料

一綴

神官・安藤経俊と石工・甲斐有雄は対照的ともいえる明治一〇年を過ごした。経俊は日記中で政府軍を「官賊」と呼んで熊本隊へ身を投じ、戦場では武器を持って戦った。有雄は故郷にあって戦争の様子を記録しながら道標を刻み、中途からは政府軍軍夫として従軍した。両者は同じ野尻郷を故郷としたが、西南戦争をそれぞれの主義・立場に拠って体験したのである。

本資料からは、戦争の翌年にこの両者が尾下小学校職員の同僚として勤務しはじめたことがわかる。経俊は教導職として、有雄は尾下集落からの投票によって児玉熊喜という人物とともに「尾下学校誘導方」として勤務を開始している。

尾下学校は明治九年（一八七六）から、地域住民の出資などを資本金として開校された。本資料中の「就学願記」によると、入学したのは付近の子弟が中心であったと思われる。入学時の年齢は五歳〜一四歳とかなりの幅があったようである。

西南戦争を生き抜いた二人であったが、こうして翌年にはともに尾下の教育のために尽力することになったのである。

二八 錦絵「鹿児島英雄揃」



政府軍の人名には「君」の敬称が付けられているが、薩軍は全て呼び捨てとなっている。



資料中央

洋装で軍刀を持つ西郷隆盛が描かれている。

切紙・多色刷

縦三七・〇

横七七・〇

三枚一揃

熊本県文化企画課所蔵

三〇 甲斐有雄狂歌集

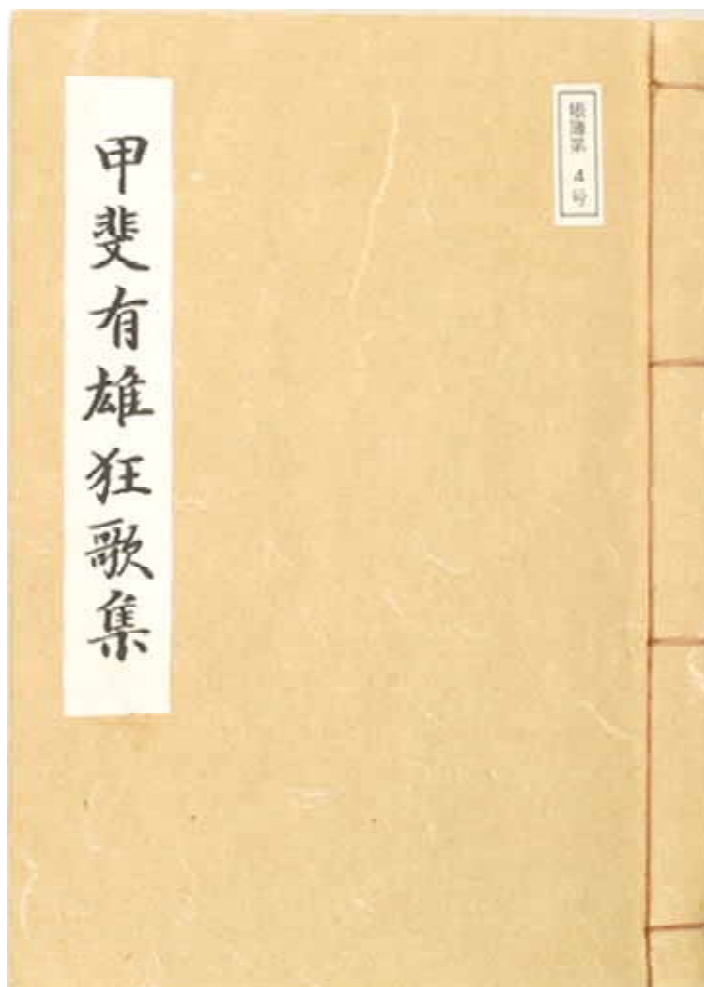
切紙・冊子装 縦一五・九 横二二・三 一冊

高森町瀬井家資料

有雄は狂歌を趣味とし、日記のなかでも数多くの歌を詠んでいる。本資料は有雄が詠んだ狂歌を近年編纂したもので、「東海道五十三つびの歌の中」・「酒づくし三十六歌仙」・「木曾路道中記」の三種が収められている。ただし、編纂者の前書きによると資料の前後はすでに欠損しており、本資料は残存している部分のみを裏打ちし、再装丁したものである。

狂歌ということで内容はユーモアを交えたものが多い。特に「酒づくし三十六歌仙」では柿本人麻呂ら「三十六歌仙」の和歌を、すべて酒にちなんだ狂歌に仕立てている。絵を嗜んでいた有雄は自筆の挿絵も添えている。酒をとても好んだという有雄が、これらの創作を楽しんでいた様子がかがえる。

有雄はしばしば「風流人」とも評されるが、和歌・狂歌に止まらず植物写生画帳など多くの創作物を残している。こうした資料に見られるユーモア精神や個性は、有雄が独力で継続した道標建立事業の原動力だったのではないだろうか。



二十六歌仙

天智天皇

あきれ酒

物

234

をのひ

ちとて天の
のこもそとこふなり

234

きの

不

あせと

集

あゝ

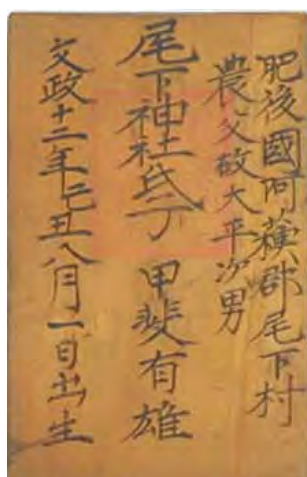
五

あ

4



三二 尾下神社氏子札



有雄の氏子札



有雄の妻・そよの氏子札

木製・墨書

縦八・八 横五・七

高森町瀬井家資料

二枚

尾下神社の氏子であることを証明する、甲斐有雄と妻・そよ二人の氏子札である。表面には右端に居住地・親の名が、左端には出生日が記されている。

ここで注目したいのは裏面の記名である。表面の氏子人を証明する神官として、安藤経俊の名が記されている。また、この氏子札が作成されたのは明治五年（一八七二）十一月であることが分かる。

「安藤経俊一代ノ履歴草稿」（資料三）によると、経俊は明治五年三月に川上神社・尾下神社ほか四社の祠掌となっている。また、この氏子札は同年二月に出された布告によって、戸別に授与した、とも記されている。

石工・有雄と神官・経俊は「尾下小学校関係書類帳簿」（資料二七）で見た通り、後には同僚となって働いているが、すでに明治五年段階で両者は「神社祠掌とその氏子」という関係であったことがここから分かる。